

あを 11

2022



寄稿

亀田虎童子

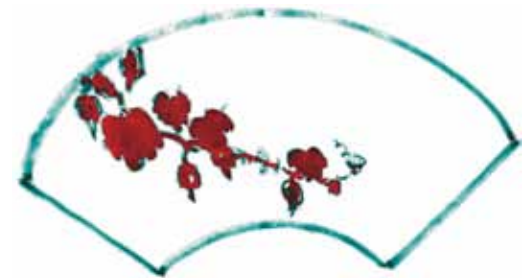
植ゑる木のあるにはあれど柿の苗
白根山のふもとを踏まへななかまど
ぼろぼろの字引買ひ替ふ一茶の忌
絆創膏で間に合ふ疵やバラ手入れ
寒雷や話相手の猫を抱き
いつはりのなきが景色や紅葉山

十一月集

したら

佐藤 竹僊

青空に溺れてをりぬ辛夷かな
ゆふさりの白山吹に雨にほふ
飴坊ひとつもをらず影ばかり
SLの窓ほど扇風機強め
飛行機が睡蓮の池眺め行く
ファーストはおさげの子なり冷し水
蟬の穴人差指は抜けぬかも



三つ目はけさとおぼしき蟬の穴
空蟬をながく育てて母の老ゆ
空蟬を大きくしたら宇宙船
極樂の尾ひれは長し金魚玉
極樂の極み金魚に餌が浮く
明けやらぬ庭隅にほと花めうが
颱風のかむさりてくるめうがの子
いづこから明りひらうて花めうが
メタンガスが炎えてゐるよな花めうが
藪蚊には刺されもせずに花めうが



曼珠沙華

須賀敏子

ゆつくりとしやべる山頂松虫草
秋祭子供のフラも参加して
梨届く付かず離れず元気です
柚子坊の日に増し太くなりにつけり
白茄子のトロトロ旨し日曜日
曼珠沙華姉は明るく物忘れ
秋蝶やさつさと歩く八十二
九月にも真夏日続くこの頃変



秋の海

都築繁子

乗りついで秋の海見る旅どころ
雲は秋埠頭に並ぶコンテナー
万国旗綻び揺れる秋港
秋の潮夜の出航を待つ親子
娘と見る今宵の月はとこしへに
野分あとタワ―は青くまばたけり



初秋

長崎桂子

秋あつし朝よりコップに水二杯
秋の蝶案内なのか道連に
枝豆のすがすがし膳見惚れをり
夜半の大雨雷鳴や台風来
補に僅か初秋の声今朝の声
やがて夜半雲間かがやく小望月
衰へぬ草の育ちや秋潯暑
うれしかな雨なきよき日墓洗ふ



雑詠

森なほ子

枝豆の胸元に飛び見つからぬ
木々鳴らす裏山よりの風は秋
石畳尽くる辺りの風は秋
夏果や黒きミイラは守宮の子
葡萄食ぶ一粒ごとに破裂させ
秋彼岸旧のつくもの皆親し
紫蘇の実をしごきし指や茶に染まり
洩るる灯を懐かしくして秋簾



中秋

赤座典子

揺らぎつつ鵲色失せる月今宵
旅支度終へし子と居る望の夜
良夜かなアンティークめく読書灯
丈高くすつくと立てり猫じゃらし
手の甲に熨斗目蜻蛉の首傾ぐ
南京の面に喜怒哀楽の穴
夕星や鳥にも秋思あるらしく
コスモスや自由に揺るる国を恋ふ



名月は今も昔も

秋川 泉

八月や生命の重さ計りをり
花茗荷食すは惜しとながめをり
色めきてめぐる月日よ曼殊沙華
よみがへる記憶の奥に落葉の香
寂寥のただよふ庭や九月尽
名月や雲間にのぞくサスペンス
一面に月射し入たる鄙の宿
名月や提灯を消し畦の道



ゆれ

七郎衛門吉保

正倉院写し茶碗に名残りの茶
秋の昼大歳時記の千頁
秋の灯や味見小皿とレシピ本
手を広げ蜻蛉を真似て蜻蛉寄す
小鳥にも漫ろく秋の恋心
浸むやうに円安続き秋の風
イタリアも右向け右の秋桜
秋桜反コスモスの世界揺れ



爽やか

篠田純子

秋あかねツイッと私の目の高さ
爽やかな立居口跡若女形
水澄むや鷺の嚙下の速やかに
俎に鰻断首の傷長し
新涼や光源氏のロマンス詐欺
盆をどり次の曲なりハウリング
水撒けば秋蝶秋蜂水飲みに



かさぶた

篠田大佳

遠雷や語彙なき少女立ち尽くす
背もたれの壊れゐて窓際の秋
天空の塔にとんぼの雨宿り
秋麗やテレビ無音のままでもいい
かさぶたのできない心風さやか
らくがきの世界を発ちて曼珠沙華



九月号作品より

篠田純子・篠田大佳・佐藤喜孝

誰も来ぬ何処へも行かぬ酷暑かな

亀田虎童子

掲句と同じく三六五日さして変らぬ日々を私も過ごしてゐる。私の環境から類推してはいけな
が一点違ふところがある。私は「行けぬ」気分だが掲句は「行かぬ」と。私の方が気弱になつてゐる。
環境にいつの間にか慣れてゐる私と違ふ。「行けぬ」・「行かぬ」には大きな気力の差がある。(喜孝)

折れやすき空蟬の足折れてゐる

亀田虎童子

蟬の抜け殻を大事に見ていた作者です。足が折れていないか心配したけれども、結局、空蟬の足
は折れていました。空蟬に命があるわけではないのですが、なんとなくそのまま欲しいとい
う願いが空蟬の形の美しさを想像させます。(大佳)

盆唄や踊りはせぬが口づさむ

亀田虎童子

盆踊りは、人の心を解放する力があるようです。馴染みのある音曲に、気持ちが浮きうきしてき
ます。「踊ってみようか」とも思うのですが、ちょっと尻込みしてしまいます。せめて盆唄を口遊
む作者の気分に、共感致しました。ちなみに私の好みの盆唄は、佃島の念仏踊りの「糸屋の娘」で

す。(純子)

血管が血管またぐ素足かな

佐藤竹僊

素足になる時期になると、自分の足を観察しがちです。自分の素足を観察していると、血管が浮いていて、こんなに血管が張り巡らされているのかと、驚きます。東京の地下鉄網も凄いですが、目に見えるだけでも、それに匹敵する複雑な構造をしていて、人体というのはつくづく不思議だと改めて考えさせられます。(大佳)

かるいのは空蟬それとも蟬の殻

佐藤竹僊

源氏物語の「空蟬」は人妻ですが、光源氏に強引に愛されてしまいます。源氏はその後も言い寄りますが、空蟬は操を守り、するりと寝所を抜け出します。思いを遂げられない源氏にとっては、「空蟬」は重い存在となり、心に残り続けます。(純子)

自転車パンク梧桐あをぎりの花の道

篠田純子

梧桐の清々しい夏の道を自転車パンクした様子があります。大変な目に遭っているのに、どこかさっぱりとしていて、何とかなるかという気持ちにさせられます。(大佳)

鰻屋の柵の俎柵の下駄

篠田純子

使はれる木の種類は違ふが、どちらも気持ちの入った柵目である。桐下駄は何本柵目があるかで値段が違ふ。柵目の俎は板前さんの心意気である。鰻屋の句で鰻を詠まずしておいしさあうな鰻を想像させる。面白い視点から鰻屋を読み成功している。(喜孝)

A I によぎる死想や夏の夜

篠田大佳

A I の存在感は今や不動のものです。完璧で無いように見えることもあります。将棋で藤井聡太五冠に負けたり、くずし字の判読アプリもどうかかな?と思う時もあります。悪い人にそのかされて、フェイク映像をつくらされたり……。 「もう駄目」と弱気になっているAIが、見えてくるような俳句です。(純子)

このやうな視点には驚いた。未来を見通す感覚の鋭さを覚えた。今のところAIも人間の考へる延長線上にあると思ふが、その先のことを考へると確かに掲句のやうに不安になる。AIは便利だ、便利だと言つてはられないのかもしれない。このやうな花鳥諷詠とはちがふ思想性のある句に配する季語は難しいと思ふ。いろいろな考へる末に「夏の夜」にされたのであらう。季語を推敲の果て無季句が生れることもあるかもしれない。なやましい問題だ。(喜孝)

セルフレジやっぱり避けるアップパ

須賀敏子

アップパを季語にしたことから、日常のほんのささいな買い物であることがうかがえます。例えば、お水と食パンを買うだけの簡単な買い物であってもセルフレジは面倒です。検品が大変だし、支払いも面倒です。うっかり検品をし忘れた日には、叱言を書かれたりします。もうちょつとなんとかならなかったのかというため息が聞こえてきそうです。(大佳)

新聞をじっくり読んで極暑の日

須賀敏子

酷暑の八月となれば新聞ではかの戦争にまつはる事に始まり、ウクライナの戦況など目をそらすずにはいられぬ記事で埋められてゐることであらう。じっくり考へながら新聞を読む事は大切なことである。

私は新聞を取らなくなってから久しい。テレビニュースも食事中は見ない。よって社会や世情に疎くなった。政治家の発言もわからないカタカナ語が頻繁に使はれている。政治家の信条とは別にして昔の政治家の書跡は格があつた。時代が下がるとともに……。今の政治家の書は見たことがないが不安だ。大分掲句の内容と離れてしまった。(喜孝)

線状降水帯の名前覚えし夏果つる

都築繁子

天気予報というのは色々新しい言葉を作るのが好きなようで、「線状降水帯」という言葉が開始した時には、「本当に予報に実効性があるのか」と懸念を示すメディアもありました。今となつては、台風が来るたびに「線状降水帯が発生した」と報じていて、定着してきたようです。せっかく覚えたのに、またしばらく使わなくなるのがあるがたいけれども、名残惜しいです。(大佳)

プランタのハーブを摘めり今朝の秋

都築繁子

悠々自適の生活を送られてをられるやうだ。朝昼晩適時に好きなハーブを摘んで手料理に添へる。このやうな充実した生活を淡々と詠む。参考にしたものである。(喜孝)

今日ひとひの助けに甘酒を飲む

長崎桂子

甘酒は今や「飲む点滴」として売りに出されています。一日を過ごすために必要な栄養があるときれています。頑張らなければいけない日の助けとして、甘酒は働く人の味方になっているようです。

(大佳)

昼下がりの畳を好む籠枕

長崎桂子

昼食後ちよつと眠たくなった。昼寝でもといふ時にふつと浮かんだといふ句。楽しくなる詠みやうだ。確かに昼寝は青畳の上が気持ち良い。それを籠枕が畳を好んでいるとは。失礼だが桂子さん

らしからぬウィットある一句である。桂子さんの守備範囲の広さを知った。(喜孝)

手を打ってクッキー乞へり夏の熊

森なほ子

牧場の熊のようです。野生の熊に殴られるととても痛いですが、どこか可愛らしさもあります。人に飼われていれば可愛らしさも一入で、クッキーを求める熊の様子は、愛嬌のある着ぐるみのようです。(大佳)

冷房や王侯のごと長椅子に

森なほ子

この句を読んですぐに次の句が浮んだ。

エジプトの女王のごとく朝寝せり

竹内裕子

である。さて弘子さんの句はともかくとして、掲句つくづく酷暑にはクーラーのありがたさに改めて思ひしらされる。どんなにお金を積んだとで昔の王侯には叶わぬことであらうといふ心持ちが見える。

それにしてもクーラーを作動させる電力を作るのにどの方法が良いのかと社会は悩む。電力が逼迫してゐると政府はいふ。解決に悩みが尽きない問題である。(喜孝)

エプロンのその一枚の暑さかな

赤座典子

平生は、衣一枚増やしたくらいで変わらないだろうと思うところですが、衣を重ねただけで、その一枚に暑さを覚えるほどの酷い暑さを思い出します。ちょっとしたエプロンでも、その暑さは甚だしく、今年の夏の異常さを後に伝えます。(大佳)

片陰を行って帰って投票日

赤座典子

選挙に関する俳句ではあるが全く肩肘を張ってゐない。殊更のメッセージもない。片陰を行って帰ることだけを述べただけである。暑い日に投票に行っただけの事だが、そこを私は面白いと思つた。却って選挙に行く意志の強さを思はせられた。(喜孝)

回向する僧にこぼれる盆の花

秋川 泉

「回向」の言葉の意味を調べると、故人が極楽浄土に行けるように読経して読経した者も極楽に行くように浄土の道を開くという意味であるようです。盆の花は僧に極楽への道を導いてくれたのでしょうか。(大佳)

鬼灯や支度ととのふ新佛

秋川 泉

新盆を詠まれた。盆支度に粗相がないやうに新佛のことを偲びながら用意をする。そして最後に

思ひを込めて盆棚の上に鬼灯を置かれたのである。新盆はことにさみしさの募るもの。(喜孝)

かき氷 昨日の夢を追ひて老ゆ

七郎衛門吉保

かき氷の感覚、冷たくて頭が痛くなる感じがあつて、昨日の夢を追つて老いる。散文に直してみました、夢の内容について考えることが読みのヒントになりそうです。かき氷を平気で食べられた時分、例えば幼い頃の夢だったのでしょうか。夢をなざると、年を重ねていると気付かされるけれども、若々しい感覚を久々に思い出しているようでもあります。二項対立の構造です。(大佳)

四方開け 風道 つくる夏の朝

七郎衛門吉保

四方に風の入る窓があるのは夏には理想的である。典型的な日本住居の間取りである。しかし朝から全窓を開放しなければならぬとは何たる暑さだ。(喜孝)



空拳法

秋川 泉

空拳法(クウケンポウ)。台湾で修業し、師匠から道場を開く事をゆるされた日本で初のクウケンポウ。

その昔、全国行脚したそのひとの少年時代の事。これは全くの不思議な縁なのです。

その昔、密蔵院(私の郷)の門前に、ひとりの少年が倒れるように踞っていた。私の母がそれを見付け、寺の中に招き入れた。話を聞くと、もう三日も何も食べていない・と。(後の話で、あの時は腹が減つてもう動けなかった。奥様に助けて頂きました・と)。まるで宮本武蔵の修業時代のような話。この時、まだ幼かった私も弟(後の住職)も、母に云われて、本堂のその人に会った。険しい表情の少年で、その少年が本堂の柱に爪でキズを付けた。太く堅い立派な柱に!!驚いた私は、そんな事をしてはいけない!!

と云ったが、柱にはキズが……。

私は大人になって、アメリカに行く飛行機の中。隣りに座った男性。長時間であつたので言葉を交わすと、アメリカの軍に関わる仕事とか。知り合いになつて、互いに帰国した後話。

そのひとは、青森在住。しかし、仕事で度々上京。それで密蔵院に招待。そして、修業時代の話からもしや!と、本堂の柱のキズを確認。何とノ少年時代のその人でありました!!とにかく皆びっくり。そんな訳で、今度は青森のその方の家に招待された。そして夜、空拳法の一門の方々を集め山の道場で闇の中。たくさん松明を灯いて(明りは松明のみ)野外で空拳法のさまざまな技を披露して下さった。客は、父母私のみの為に。(アメリカの軍に、空拳法を指導することが仕事でした)。空拳法は、青森のそこから外には出さない・と云っていたので、やはり広めてはいないと思います。

人生の不思議な旅となりました。

秋收集

コロナ禍や祭の寄付の来ずなりぬ

亀田虎童子

八月の眩しきものにはだへかな

佐藤 竹僊

加害者の八月六日躁がしく

篠田 大佳

バイバイの後に広がる闇を蟲

二十品目食べて八月十五日

須賀 敏子

桃が来た皮つきのまま食べてみる

爽やかやたまさか都電の新車輛

都築 繁子

南瓜煮て美味しと思う敗戦日

汗ながる甘味を含み麦茶のむ

長崎 桂子

鉢もたげたるに気付かぬ蜥蜴の子

森 なほ子

朝方の雨音はもう秋の雨

秋の蜂背もこもこと花つたふ

赤座 典子

秋澄めり七つ並んで千切れ雲

主義主張少し異なりまづ麦茶

秋川 泉

鉄骨を垂直に立て晩夏光

富士五合釣鐘草と下界見る

七郎衛門吉保

法師蟬日比谷の水場錆にけり

篠田 純子

喜孝抄



ヒッチハイクの旅 篠田純子

若い時に、日本人4人と外国人留学生3人で、ヒッチハイクをしながら南紀を旅した。熊野↓瀬八丁↓潮岬↓十津川↓桜井↓京都を巡った。男性2人女性4人は、3班に分かれ集合地のユースホステルを目指す。スマホの無い時代なのに、不思議と滞り無く旅は進んだ。ハワイの日系の「ダイアン」は、日本語を理解していたが、アフロヘアの「ラニ」さんはほとんど英語だったのに、京都に着く頃は、日本語が上手になっていった。珍道中を写した8ミリフィルムが残っているが、そろそろデジタル化したいと思っている。



古利根 篠田大佳

親戚の子が幼稚園の時、運動会を見に行っていました。東京から電車で一時間、駅から十分くらい歩いたところは、自然と生活の混ざった生産と消費の境界です。古社の前を左に曲がり、ラジコンのサーキットがあり、コンビニを右に曲がった幼稚園の入口には秋桜子の句碑があり、田圃には穂田が干してあり、利根川が目の前に広がります。日帰りで行けるところですが、旅情を味わえる土地です。

あをキーワード俳句辞典(ゆのーゆび)

湯呑

手びねりの湯呑のゆがみ暮早し
麦刈や薬缶と湯呑携へて
さかな偏つくしの湯呑夕野分
母の湯呑友のエプロン臍にて
白々と並ぶ湯呑や秋の暮
新涼や湯呑みに煎茶たつぷりと

湯葉

新豆の湯葉掬ひとる指赤し

指

禁煙の指のせかせか冬帽子
恋猫の鼻先なでて指よごす
二度三ど指に力を薄氷
苗と挿す泥のぬめりか指先に
横坐る少女の指のさくらんぼ
指添へてブルーのカクテル夜の秋
北風に指ちぎれむと帰宅せり
苗札を挿す指先に土触るる
メール打つ指おぼつかない目借時
ボタン戦争ひとさし指に触る汗疹
端近く指藍に染め浴衣縫ふ
螢や指提灯をまれ出でて
指切りのぬくみそのまま赤のまま

田中 藤穂
鈴木多枝子
定梶じよう
赤座 典子
森 なほ子
須賀 敏子
東 亜 未
後藤 志づ
竹内 弘子
佐藤 恭子
栢森 定男
後藤 志づ
篠田 純子
赤座 典子
栢森 定男
芝 尚子
佐藤 恭子
芝 尚子
佐藤 恭子
佐藤 恭子
佐藤 恭子

指先の荒れ始めたり一寸袖
指でぬぐふ涙の理由ゐのこづち
手套のままの指切りシクラメン
鍵をさす音指先に十三夜
一の指二の指勤労感謝の日
指のちから衰へにけり年用意
手袋の指動き出す桑括る
やはらかな和紙に指切る神無月
吊草で悴みし指ストレッツ
あを一天指鉄砲ならうてるかな
蛇と言ひし指をいち日春北風
食べるともなく粽の紐を指に巻き
指からの血をにぎりしめ蛇莓
指染めて摘んでは捨てし蛇いちご
吾子の子の指しなやかに青田風
指立てて蜻蛉とまるを待つ児かな
指の先突然に秋深まりて
つまみたるバツタ指に香がしみぬ
折紙に指先痛し夜長かな
冬ぬくし浅草絵地図指で追ふ
肝割れの指底ひつつ鶴を折る
シャボンの香残る指先余寒かな
弦に置く春の海弾く指細し

森 理和
篠田 純子
芝 尚子
後藤 志づ
堀内 一郎
芝 尚子
松村美智子
関口 ゆき
赤座 典子
佐藤 恭子
佐藤 喜孝
後藤 志づ
東 亜 未
竹内 弘子
芝宮須磨子
吉成美代子
森 理和
高橋 信佑
芝宮須磨子
東 亜 未
森山のりこ
芝宮須磨子
吉成美代子

蟻を追ふ幼の指先蟻となる
赤んぼ立つ孔雀びらきの足の指
妻病めり菓物の香指に溜め
白玉や遊びごころの指の先
指を触れ弾く種待つ鳳仙花
稲妻や子らと指折り窓を見る
栗剥の証となりし指の傷
秋の雲指差す稚に顔並ぶ
指ぬきも針もつかはず深む秋
手品師の指のもつれや冬はじめ
節太き指みえかくれ花八つ手
悴みし指なだめつつ辞書を繰る
娘来る指折りかぞえ蒲団干す
考へてゐる足の指炬燵かな
日向ぼこひとりが指に縋帶し
大試験五本の指で顔覆ふ
ものの芽や自傷少女の指白し
春風に立てたる指の發光す
指跡の畝残る中穀象虫
子の指へうつる綾とり暮春はも
指さしてたとへば白き秋の水
夏の蝶幼の指がそつと追ひ
指櫛のおぼつかなくて白木槿

東 亜 未
佐藤 喜孝
渡邊 友七
佐藤 恭子
森 理和
齊藤 裕子
鈴木多枝子
東 亜 未
竹内 弘子
篠田 純子
赤座 典子
赤座 典子
長崎 桂子
定梶 じょう
定梶 じょう
篠田 純子
篠田 純子
佐藤 喜孝
齊藤 裕子
定梶 じょう
堀内 一郎
芝宮須磨子
芝 尚子

あやとりの指よく動く秋微雨
篠笛の指秋風をあやつれり
折鶴は指のあはひから氣息
指先にパンの弾力春の風邪
炉塞の指美しく灰ならず
四顧の間の天を指さし松の芯
まづ指の野ばらの棘を抜いてから
天高し大い佛に太き指
種を採る指とてのひら風のたつ
別れぎは夕三日月を指させり
毎日の指先の輝山歩き
指先の眼となりて糸糸編む
指の胼そつといたはる夜のラジオ
冬籠る足にもくすり指があり
戸袋に指はさまるる朝寝かな
母に真似指跡のこす蓬餅
蝸牛つまむに指のちから抜く
青臭しトマトのわき芽つみし指
早苗ほぐす指へ朝沁む母郷の水
調理場の指差し点検はたた神
ふと指のすすきの傷と氣づくまで
子午線を指ではじいてゐる三日
パティシエの指先春の色を生む

田中 藤穂
田中 藤穂
佐藤 恭子
渡邊 友七
芝宮須磨子
木村茂登子
芝 尚子
篠田 純子
佐藤 喜孝
田中 藤穂
須賀 敏子
東 亜 未
長崎 桂子
定梶 じょう
竹内 弘子
鈴木多枝子
竹内 弘子
竹内 弘子
渡邊 友七
竹内 弘子
芝 尚子
佐藤 恭子
森山のりこ

春雪の極み指先痺るる日日
指先に痛みが残る桜冷
吊皮に指あそばせて四月馬鹿
花衣指の先までさくらいろ
花の雨かんじん縋で指括る
指先に言葉の溜るさくらんぼ
さはやかな合掌の指青つむり
親指で話す携帯文化の日
小春日や白紙に動く指の影
白鳥徳利の首に指当つ雨水かな
二日灸嫁ぎて耐えよと祖母の指
折れ口に親指隠し春日影
花冷の指の奏でる不調音
指それぞれ仏に見ゆる穀雨かな
漢江を指でおさへる春の蠅
足の指大きく上げ蓮華踏む
底紅や指入れて児の笑ひ居り
鮎食うべ指の香れり川の音
月見団子母の指先なつかしく
上げ板に指入れて曲ぐ霧深め
指銜ふ児を抱く羅漢小六月
悴める指まげのばし針に糸
指先のしなやかにして豆乳鍋

長崎 桂子
森山のりこ
鎌倉喜久恵
須賀 敏子
篠田 純子
堀内 一郎
篠田 純子
遠藤 実
東 亜 未
佐藤 恭子
藤野 寿子
芝宮須磨子
長崎 桂子
篠田 純子
佐藤 恭子
鎌倉喜久恵
芝 尚子
鎌倉喜久恵
芝宮須磨子
佐藤 喜孝
赤座 典子
赤座 典子
芝宮須磨子

二八や続飯に指をとられけり
恋猫に指鉄砲をむけてみる
地図の上指で歩いて花の道
指鉄砲にしとくか憲法記念の日
指太き父は胡座で目刺食ふ
短夜や指で繰るもの玩具めく
草むしり指の先より暮れにけり
目の中に指を入れたる暑さかな
足指の一本捻挫牛蒡引く
百段を昇り秋天指の先
白く細き指ひよんの実を吹く女
一遍忌草を掴みて指濡らす
蜜柑の香指に残りし欠伸かな
手と足の指さらはるる霜の夜半
一心に指吸ふ赤子春隣
指先から寒九の水のカテーテル
うららかや時々動く足の指
春障子可愛い指の穴は孫
鍵盤を跳ねる指先シクラメン
キッチンの指さし点検いなびかり
絲ざくら指をからめてみたくなり
春の夕間遮の指のなかなかに
指に来しれんげに近づくものあり

佐藤 恭子
佐藤 恭子
鈴木多枝子
佐藤 恭子
遠藤 実
赤座 典子
鎌倉喜久恵
堀内 一郎
東 亜 未
森 理和
木村茂登子
田中 藤穂
芝 尚子
佐藤 恭子
田中 藤穂
篠田 純子
篠田 純子
田中 藤穂
大日向幸江
竹内 弘子
佐藤 喜孝
佐藤 恭子
佐藤 恭子

あとがき

高校ビブリオ

「高校生が薦めの本を紹介し、聴衆が最も読みたい作品を投票で決める」高校生書評合戦（ビブリオバトル）都大会」各校での予選を選ばれた124人が出場し、中央大学高等3年、樽本咲月さんが紹介した「オーデュボンの祈り」が最高賞の「チャンプ本」を獲得した。（中略）来年1月22日大阪で決勝大会が開催される」（讀賣新聞 11月1日）

このうれしい記事をLINEで篠田純子さんが知らせてくれた。22ページのカットは咲月さんの描かれたもの。「桜草十八歳は成人に 須賀敏子」

短文の題「鉛筆」

私は今俳句を推敲するときの筆記具は鉛筆にしてゐる。決まる前は身辺にあるボールペンであったりシャーペンシルと構はなかった。ある時鉛筆が一ダースプラスチックの箱に入ってきた。我が家には引越す前からアリーエッティが棲んでゐたが一緒に引越してきたらしい。先日もピーラーを使おうとしたらない。何に使ったのか知らないが数日したら返してきた。この鉛筆は私の記憶にないから

妻の物だったのだらう。この機に散らばってゐた鉛筆を集めた。藤穂さんが句会の折配られた恐竜が派手に描かれたもの、三角形など面白いものもある。息子が好きな全日本プロレスや湯島天神の「受験に打ち勝て！」などがあつた。息抜きに鉛筆を削るときは楽しい。私はもっぱら小さな鉛筆削りを愛用してゐる。良質な木を使った鉛筆は本日も楽しめる。以前は尖らせてないのが好きだったが今は違つてしまった。どうしてだかわからない。

皆様は俳句手帳はどのような物を使い、どのような筆記用具を使つてをられますか。（喜孝）

一〇二二年十一月号

発行日 十一月九日

発行所

〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話

090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）